

農林水産大臣賞受賞

ひろうら de 田舎暮らし！ - 現役のガキ大将がお待ちしております -

受賞者 いなかぐ ひろうら たいけんすいしんきょうぎかい 田舎暮らし体験推進協議会

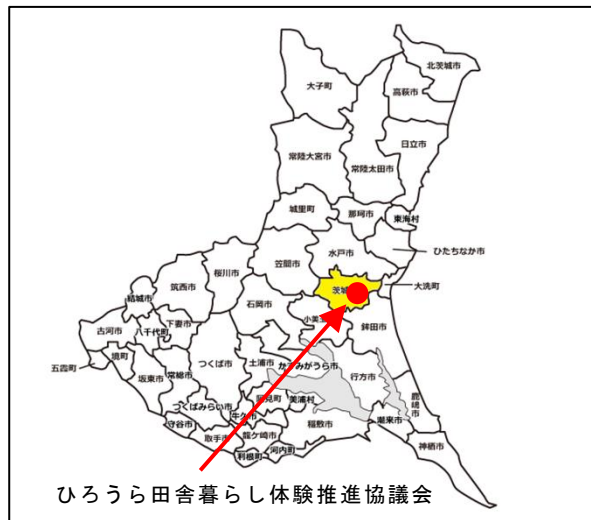
ひがしいばらきぐんいばらきまち
(茨城県東茨城郡茨城町)

■ 地域の沿革と概要

茨城町は、昭和 30 年に長岡村、川根村、上野合村、沼前村の 4 村が合併、さらに昭和 33 年に石崎村を編入合併し、現在の姿となっている。

茨城町は、東京都心から約 100km、茨城県のほぼ中央に位置し、ラムサール条約に登録された汽水湖「涸沼（ひぬま）」をはじめとする水と緑の豊かな農村部と、県庁所在地の水戸市に隣接する都市部が調和した町となっている。

第 1 図 位置図



■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

町の約半分を占める農地では、メロン、いちごを始め、さつまいもや栗等の多くの農産物を生産している。さらに町のシンボルである「涸沼」は、大粒のやまとしじみやシラウオ、ハゼ等の漁業も営まれている。また、平成 27 年 5 月に国際的に重要な湿地であることが認められ、ラムサール条約に登録されている。

ひろうら田舎暮らし体験推進協議会の活動拠点である茨城町下石崎集落は、涸沼の北東部に位置する集落で、漁業や農業が盛んに営

第 1 表 地区の概要

事項	内容
地区の規模	集落の集合体
地区の性格	地縁的な集団等
農家率 (内訳)	20.3%
	総世帯数 11,356戸 総農家数 2,310戸
専業別農家数 (内訳)	専業農家 539戸 1種兼業農家 256戸 2種兼業農家 847戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 12,158ha 耕地面積 5,090ha 田 2,410ha 畑 2,680ha 耕地率 41.9% 農家一戸当たり耕地面積 2.2ha

注：町全体の数値（H27 年）
専業別農家数は販売農家の内数のため、総農家数と一致しない

まれているが、他の地域と同様に少子高齢化の波が押し寄せており、さらに東日本大震災後は、漁獲量の減少にも見舞われている。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

「ひろうら田舎暮らし体験推進協議会」の活動拠点である茨城町下石崎地区は、多くの民宿等が営まれ、数多くの観光客や釣り客が訪れていた。しかし、東日本大震災以後、民宿の廃業等が相次ぎ、地域の意欲も著しく低下していた。このため、下石崎地区の有



写真1 瀬沼での「しじみ漁」

志により、農家民泊、農漁業、伝統芸能体験等により都市と農村との交流を図り、地域を活性化しようとする機運が生まれ、平成27年に本協議会を設立した。設立後は、農家民泊等の活動を積み重ねる毎に地域住民の参加は増加し、活動の範囲は下石崎地区全体から町全体に広がっている。

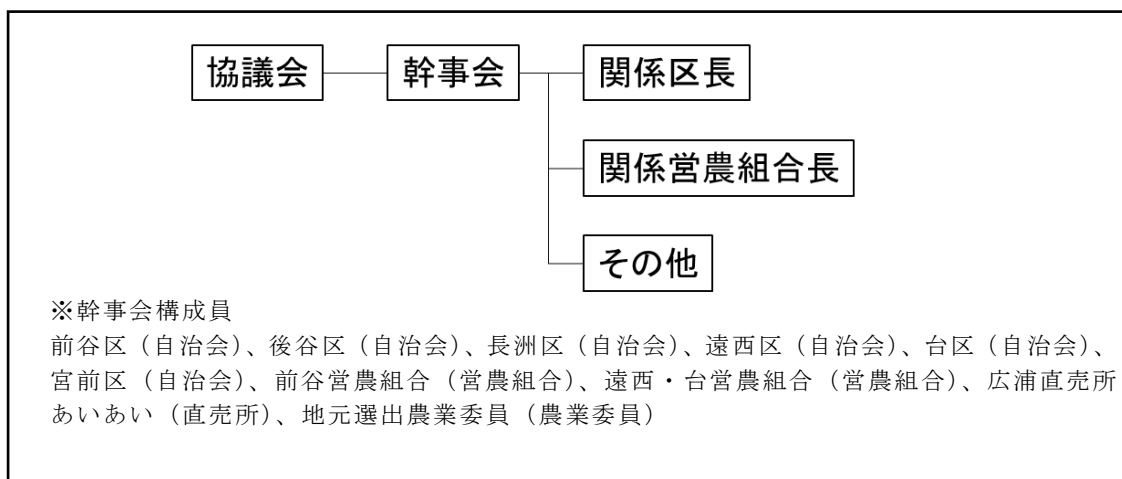
(2) むらづくりの推進体制

ア 当該集団等の組織体制、構成員の状況

■ひろうら田舎暮らし体験推進協議会

- ・設立年：平成27年3月26日
- ・役員：会長（1人）、副会長（1人）、会計（1人）、監査（2人）、参与（1人）、事務局（1人）

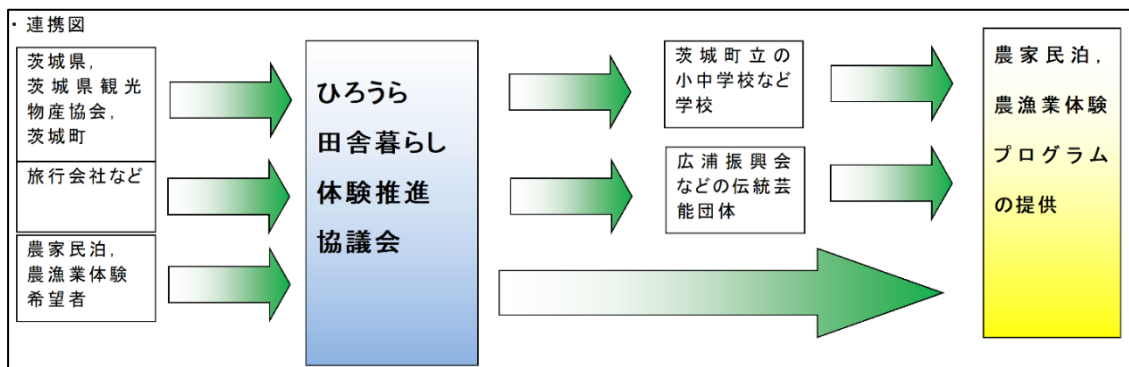
第2図 むらづくり推進体制図



イ 当該集団等と連携してむらづくりを行う他の組織、団体及び行政との関係

関係する地域の組織体制は、行政機関としては茨城町、茨城県、また関連団体として茨城県観光物産協会、交流事業の受入れとして茨城大学、茨城町内の小中学校、幼稚園、保育園、水戸市内の私立高等学校、体験プログラムの受入れ等として広浦振興会、廣浦につぱち會、小浦あんばの會、遠西若連と連携し活動を行っている。

第3図 むらづくり連携図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

本協議会は、ラムサール条約に登録された豊かな生態系を誇る涸沼を活用した伝統漁業や、歴史ある地区ならではの伝統芸能・工芸を県や町等の関係機関及び地域住民と連携して体験プログラムを準備し、農家民泊を活用しつつ体験を提供している。これら活動を通じて小中学校、高等学校、大学での交流も盛んに行われている。

また、本協議会では、設立当初から外国人を積極的に受け入れており、受入者の約8割がインバウンドとなっている。典型的な日本の原風景と言える景観、自然環境、農漁業体験、伝統芸能等のメニューが非常に好評で、毎年訪れるリピーターの獲得にも成功している。

2. 農業生産面における特徴

(1) インバウンドに大好評の農家民泊

平成27年7月に農家民泊を開始し、その半年後の平成28年3月には、農家民泊の初のインバウンドとなる台湾からの高校生を受け入れた。涸沼の自然環境と農村の田園風景、農漁業や郷土芸能等の学べる体験メニューが好評で、その後のレポートにつながっている。

これまで受け入れた海外の学生は、平成 27 年度からの累計で、850 人を超えており、年々増加傾向にあり、順調に推移している。

(2) 農漁業・郷土料理体験

協議会の農園に加え、連携する農家で栽培されているさまざまな野菜・果物の収穫や、汽水湖の涸沼での、しじみ漁、うなぎ、しらうお、ハゼ、スズキなどの伝統漁業体験・見学など、地域の農業や漁業を生かした様々な体験プログラムを作成し、農作業体験を提供している。また、自分達で収穫した農水産物を地元の郷土料理「つと豆腐」や「花巻寿司」などに自ら調理する郷土料理体験は、食育にも貢献している。これらの体験プログラムと農家民泊を組み合わせることで、単なる体験ではない「学べる体験」を提供しており、子供たちを大きく成長させている。



写真 2 伝統漁業体験



写真 3 郷土料理体験

(3) 農漁業等への経営改善

今まで農業や漁業のみの収入であった農漁家は、農家民泊や農漁業体験に取り組むことで、新たな収入を得られるようになってきている。また、地域に目立った観光資源もなく、滞在する機会も少なかった地域であったが、交流人口も増加し、地域経済への波及効果も生まれている。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 伝統芸能継承への貢献

協議会の体験プログラムでは、地域の伝統芸能の体験を提供することで、地域文化を知ってもらう取組を行っているが、このプログラムの体験料が伝統芸能団体等の収入となることで、これらの団体の維持・活動に関する経費にもなり、伝統芸能の



写真 4 伝統芸能体験

継承に貢献している。

(2) 生きがいや活躍の場の創出

協議会では、当地域を訪れる相手側の学校や団体等が農家民泊を通じてどのような目標を設定しているのかを十分に理解・把握し、ニーズに応じたプログラムを提案できるように農漁業、自然観察等のカテゴリーから自由に組み込めるような体験メニューを開発・用意している。



写真5 農家民泊「お別れ会」

こうした体験プログラムは、体験者の満足だけでなく、受入家庭や体験指導者の生きがいや創出や女性の活躍にもつながっており、農家民泊受入家庭は60歳代・70歳代が殆どであるが、外国人とのコミュニケーション能力の向上を図るため、茨城県観光物産協会等の協力により、英会話のレッスンへの取組や外国人学生との手紙やメールによる交流なども盛んに行われ、個人レベルでも国際交流が行われている。